

黒松

第76号

令和5年7月5日発行
柏崎刈羽地区保護司会
TEL(0257)23-8615
柏崎市豊町3-59
総合福祉センター内



7月は「社会を明るくする運動」強調月間です

蛍と天の川の共演（柏崎市鵜川） 撮影／保護司 佐藤俊男



会長就任に
あたって

柏崎刈羽地区保護司会会長

横田 良英

地域の皆様には日頃より「社会を明るくする運動」・「愛の協力募金活動」にご理解をいただき、ご協力ご支援に心より感謝申し上げます。

保護司の使命は犯罪や非行に陥った人たちの更生支援と犯罪防止活動です。しかし、こうした活動は保護司会だけでなし得ることはありません。行政、地域住民、経済界等多くの方々の支援が必要です。

犯罪は減少傾向にあるとはいえ薬物事犯をはじめとして再犯率は依然として高い水準にあります。再び過ちを犯さない環境整備に努めると共に地域の安全安心に皆様と取り組んでまいりたいと思っております。

柏崎刈羽保護司会では社会福祉センター内に更生保護サポートセンターを設置し、犯罪や非行の防止活動への支援、関係団体との連携など更生保護活動の拠点としています。お気軽にお立ち寄りください。

今後も「社会を明るくする運動」など啓発活動や犯罪・非行のない地域社会を目指し努力していきたいと思っております。更なるご支援、ご協力をお願い申し上げます。

「愛の協力会員」募集のお願い

更生保護法人 新潟県保護観察協会

理事長 花角英世

7月に入りましたら、各町内会長さんを通じて会員募集のお願いに参りたいと考えています。

ご協力をよろしくお願い致します。

この会員募集についてのご照会は左記宛にお願い致します。



柏崎刈羽地区保護司会会長 横田良英
☎ 0257-23-8615 (保護司会事務局)



令和5年度「社会を明るくする運動」 作文コンテスト実施要綱(抜粋)

◎主催

社会を明るくする運動

犯罪や非行を防止し、立ち直

りを支える地域のチカラ

新潟県推進委員会

法務省・新潟保護観察所

◎応募規定

(1) 応募資格

小学生及び中学生

(2) テーマ

社会を明るくする運動の

趣旨を踏まえ、日常の家庭生

活、学校生活の中で体験したこ

とをもとに、犯罪・非行のない

地域づくりや犯罪や非行をした

人の立ち直りについて考えたこ

と、感じたことを題材としたも

のとします。

(3) 原稿の枚数

400字詰め原稿用紙3～5枚

程度

(4) 応募先、締切り

社会を明るくする運動



柏崎・刈羽地区保護司会事務局

柏崎市豊町3-59

柏崎市総合福祉センター内

(☎ 23-8615)

締切り 令和5年9月8日

(金)

◎表彰

柏崎市および新潟県より、それぞれ表彰を行います。

「更女」って何？

柏崎刈羽地区更生保護女性会 会長

酒井美代子

「傷つきし心の子らを抱きよする母ともなりて慈しまなむ」昭和34年9月当時の皇后陛下から更生保護関係者に賜った御歌（みうた）です。総会等の折、最初に歌います。

更女会中央研修で、法務省宮田保護局長が講義された内容の一部を紹介します。『「傷つき



社明運動の準備作業です

し心の子ら」と歌われていますが、心は見えませんが、「心の傷」が見える想像力を持ち「あなたは、私達の地域社会の大事な一員です」というメッセージとなる活動がある。それが更生保護女性会の活動だろうと思うのです。活動に当たり求められる態度は「五事を正す」です。五事とは「貌・言・視・聴・思」で、和やかな顔つきで思いやりの言葉で話し、澄んだ目でものごとを見て、耳を傾けて聴き、真心を込めて相手のことを思うことを言います。『私達も「五事を正す」態度で活動して参りたいと思います。本年度の総会も無事終了し活動が始まりました。皆様のご理解ご協力をお願い申し上げます。

保護司のつづやき

いよいよ終活

いいえまだまだ

保護司 北村 勤

後期高齢者の仲間入りも近づき、保護司の仕事も卒業間近となり、いよいよ終活を身近に感じる年齢となった。

新型コロナウイルスによる2年間、スポーツ大会がほとんど中止になったことで目標を失い、昨年からは規制されながらマラソン大会は再開されたが走れない。ランニングに身が入らなくなったのだ。

昨年は久しぶりに仲間と火打山と妙高山の登山に行ったが、妙高山の険しさにたじろぎ、妙高山はスルー。体力の衰えとはこういうことか。

終活が心をよぎる。今年からは、地域の仕事、アルバイトも終わり、心身ともに自由人となった。この時間を楽しもうと思っている。



笹ヶ峰の登山口で

誘われて、「ゲートボール（GB）」の仲間入りをした。仲間の中では、最年少だ。GBは高齢者のスポーツとして普及しているが、ジュニアの全国大会も国際大会もあるとか。繊細で奥の深いスポーツで、先輩諸氏になかなかなわかない。今はこれをクリアしないと「終活」できないようだ。



劇団THE風・FOU座長 猪俣哲夫

演劇のある町をめざして

学生の頃から、いつか演劇をやりたいと思っていた。本当は映画なのだが、素人には難しい。演劇なら仲間を集めて、適当に台本を書いて、練習すれば発表ができる。映画と違って、芝居は公演という発表の場に容易にたどりつけるのである。

戦後、青年団や職場での演劇活動が盛んだったのは、娯楽がなかったこともあるが、言いたいことをつとり早く表現できたからである。

そんなわけで我らの劇団は1986年、柏崎演劇研究会の指導を受け、旗揚げすることができた。以来、オリジナル、

既成作品など合わせて55回の公演を行ってきた。

よく37年も続いたと思うが、続いたというよりやめなかつただけの話だ。活動自体、そ



れほどほめられたものではない。結成から15年間は年2回だった公演も、その後は年に1度の演劇フェスティバルに参加するだけとなっている。

その間メンバーは減り続け、観客も減り続けている。発展しているというより、ひたすら縮小している。実際のところ何度も解散しようかと思つたが、メンバーにたしなめられて思いとどまっている。

そんな弱小集団ではあるが、わが町においては存在そのものに価値があると思つている。いつぞやの公演は60人の動員だった。たったこれだけの人しか見なかったわけだが、それでもその人たちに見てもらったということの意味がある。

また、作者名や作品名が人の目に触れることも重要だ。いつも公演の際は柏崎日報に取り上げてもらうのだが、おそらく別役実、竹内銃一郎な



んていう劇作家は、ほとんどの人が知らない。作品も一部の芝居好きでなければ見たこともないはずだ。それでもそうした記事が出ることで、この町の文化度は上がる。

つまり、「劇団ザ・フーは毎回、刺激的な舞台を見せてくれる」、「へんな劇団がこの町にある意味は大きい」と思ってもらえることが、我らのレーゾンデートルである。